

神奈川大学21世紀 COEプログラムに 寄せて

巻頭言



神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・元教授
網野 善彦

歴史民俗資料学研究科が創設され、発足してから、すでに十年の年月を経過した。そして今また、COEプログラムの“拠点”として「人類文化研究のための非文字資料の体系化」をテーマに、研究科が新たな研究を開始、推進しようとしていると聞き、年月の流れの早さを痛感するとともに、その間の研究科の活発な活動と急速な発展に、あらためて目をみはる思いがしている。

もともとこの研究科は、1982年、神奈川大学が日本常民文化研究所を招致し、付置研究所としたのを契機に、研究所自体をその重要な基盤の一つとして出発した。そして、すでに長年にわたって蓄積されてきた研究所の厚みある研究成果を継承し、また研究科の新たな活動を通して、さらにこれを拡大・深化させ、大きく発展させることを、その目標としている。

実際、研究所の創設者渋沢敬三は、当初から「歴史学・民俗学に対して『民具学』の確立」を主張するとともに、それを実現するための一つの仕事として、「『字引』に対して『絵引』の編纂と刊行」を提唱した。これは誠に個性的で独自の発想といつてよかるう。

渋沢はみずからも、その実現に向けて様々な形で力をそそいできたが、結局それは、渋沢が世を去ってから、『絵巻物による日本常民生活絵引』（角川書店 1964年～1968年）として刊行された。このいわゆる『絵引』が、神奈川大学に移管されてからの研究所での作業を通して、さらに索引を付し、全五巻の形で、平凡社によって再刊され（1984年）広く世に知られるようになったのである。

しかし、このように、文字や文章「文字史料」だけではなく、絵画・民具などの多様な非文字の世界についても、これを「資料」として注目・重視する渋沢の姿勢はまことに的確・正当であり、さらにゆたかに継承・発展させられなくてはならない。

COEプログラムのテーマは、まさしくこの課題に正面から応えるものであり、その研究の達成が、歴史学・民俗学のみならず、広く学問全体の進展に寄与することは間違いないといえよう。豊かな成果の結実を期待しつつ、研究の順調な発展を心から祈りたいと思う。